

郷土の偉人「篠原無然」テーマに

合同郷土学習

栃尾小
本郷小

講師に森瀬一幸元・高山市教育長

吹雪の安房峠を越え、平湯を目指していた一人の青年が雪に行く手を阻



まれ息絶えた。飛騨の社会教育の先覚者と語り継がれているこの篠原無然をテーマにした栃尾・本郷小学校6年生の合同郷土学習が今月29日から4回、両小を会場に始まる。題して「篠原無然」授業講話。講師は永年、高山市の教育長を務め、現在、中部大学客員教授の森瀬一幸さん。両小の6年生は合わせて26人。この授業講話を通して「郷土の偉人

に対する理解を深め、故郷への愛着を深めよう」という思いで3年前から続けられている両小の名物学習だ。
無然(本名・篠原禄次) Ⅱ写真右Ⅱは明治33年3月7日兵庫県の出身。大正5年4月25歳のとき、早稲田大学を中退して代用教員になるため上宝村役場を訪れた。
なぜ上宝村へ来たのか。無然に詳しい地元の

教育者によると、無然は敢えて山深い上宝村第一小学校(現・本郷小学校)を希望し、代用教員に採用された。先生はたった1人、児童は1年生から6年生までわずか10人。「純朴な子どもたちに愛情を注ぎ、一緒に正しい世の中を見る目を養いたい」と、上宝村を選んだのだ。代用教員の傍ら地元青年団をつくった。
無然はその後、大阪で病院を通じて人々の救済活動に従事し、その社会的な指導力が買われて東京の社会教育の仕事を頼まれ、東京へ行くことを決心した。安房峠へ向かったのはその時だった。「平湯の人たちに本当のさよならを言いたい」と。

だが、安房峠は11月というのに猛吹雪だった。それでも無然は「平湯のひとたちに早く会いたい」と峠越えを急いだ。平湯の明かりが真下に見える峠の下りまでやって来たが、雪に行く手を阻まれてしまった。
無然は地元の青年たちと作詞・作曲も勉強。その詩の一節にいまも唄い続けられているのが「飛騨青年の叫び」だ。
「あぁ偉かなるかな 飛騨の山、あぁ美かなるかな 飛騨の溪(谷)、あぁ清きかな飛騨の水」。
合同郷土学習の会場は
▽9月29日(火) 栃尾小
▽10月8日(木) 本郷小
▽10月13日(火) 栃尾小
▽10月22日(木) 本郷小。